

スルメイカの産卵様式と産卵数の推定* (抄録)

安達 二郎

魚類の資源研究において、再生産機構を研究追求することは、基本的な内容の一つである。スルメイカについては浜部(1962)が産卵実験により、産卵行動と初期発生および孵化、孵化直後の幼生の観察などの産卵生態および、発生学的研究をしている。しかし産卵様式とか産卵数といった数量面での研究はほとんどなく、唯一、新谷(1967)が30~50万粒という産卵数を報告しているにすぎない。

魚類の産卵様式は個体数調節機構の重要部分を占める産卵数を規制すると考えられる。すなわち産卵数は卵母細胞の大きさの度数分布におけるモードの数および、1生殖期間中の産卵回数によって決定されるであろう(例えば、Nakai, 1963)。このような考え方にもとずき、日本海南海域で漁獲されたスルメイカの熟度と卵径分布の関係から、産卵様式と産卵数を推定した。

要 約

日本海西南海域で漁獲されたスルメイカの熟度と卵径分布の関係から、産卵様式と産卵数を推定した。得られた結果は次のように要約される。

- 1) 熟度と卵巣卵の平均卵径との関係は、未熟個体では熟度が進むにつれて平均卵径が大きくなっていく。また成熟個体では、熟度に関係なく平均卵径は一定である。
- 2) 成熟個体における熟度と輸卵管卵の平均卵径との関係は無関係で、平均卵径は一定である。
- 3) 成熟個体における卵巣卵と輸卵管卵の卵径分布は、正規分布であると考えられる。それぞれの平均卵径は0.821 mmと1.199 mmである。
- 4) 卵巣卵は未熟卵主体、輸卵管卵は成熟卵であることから、産卵様式としては2峯分割産卵が考えられる。また、2回産卵が推測される。
- 5) 1回の産卵数の範囲は、30,000~310,000粒と推定され、平均的に100,000粒が産卵されると推定される。

* 昭和59年度イカ類資源研究会議研究報告(北海道区水産研究所, 1985)に発表した。